

外大生にて候へども

鵜飼尚代

のを読んでいきたい。

二〇一七年度Ⅰ期は、近世（江戸時代）名古屋の武士の家に伝わる家訓を取りあげたい。最初は尾張藩の初代藩主徳川義直の家訓を読む。尾張藩は御三家の筆頭という立場にあるので、大名とはいえ、特殊な立場に置かれている。そうした立場が藩主の家訓にどう反映しているか等、読み取っていきたい。藩主の次に藩士の家訓を読みたいと考えている。」

この釣書につられた我がゼミ生は、おだやか、にこやか、すこやか。このような学生に、熱くても我慢して頑張れ、と言うのは酷なのではないか。

ようこそ我がゼミへ

年齢・職業にかかわらず、誰しも「これでよいのか」という思いを抱きながら生活している。教師の場合、教壇の上で常に「これでよいのか」と考えながら授業をしていると言つてよい。「これでよいのか」と煩悶する内容は様々で、アレはどうだ？コレはどうだ？と思いつらせているうちに、悪くすると自分の資質を疑うことになるのだが、ここではそうしたネガティブな「これでよいのか」ではなく、ちよつと嬉しい「これでよいのか」の例を紹介したい。

世界教養学科の学生も三年生になるとゼミを受講する。「あなた方は物好きですね」という言葉に熱烈歓迎の意を込め迎えた学生は若干名だったが、あのゼミ紹介に釣られた学生なのだから、煮ようが焼こうが料理人の勝手、少々熱くても頑張るのだぞ、ということになるはずだ。

そもそもゼミの説明会で配布した私の釣書は以下の通り。

「資料をじっくり読み進めながら問題を抽出し、それをテーマとしてレポートを書くことを目指す。資料としては、地元名古屋や名古屋周辺の地域で書かれた文献で、その時代の思潮や制度などを大いに反映するも

さあ、始めましょう

私たちが読み始めたのは、尾張藩初代藩主徳川義直（一六〇〇—一六五〇 在位・一六〇七—一六五〇）が継嗣光友（一六二五—一七〇〇 在位・一六五〇—一九三）に遺したとされる家訓である。

ここで、義直について若干解説したい。最近、名古屋城正門前に「義直ゾーン」なる飲食店街が出現し、少々知名度が上がったその「義直」である。尾張藩の初代藩主として藩の礎を固めた英明な藩主で、元和三年（一六一七）に「御仕置」を開始するや、法度の制定、藩の諸機構の整備をし、家臣の知行の増加も行い、入鹿池を開墾し農業の振興も図っている。しかし、私は専門の関係から、特に学問環境を整えた殿様として学生に紹介してきた。義直が実際に尾張の政治を執るのは、大坂夏の陣（元和元年）の後、いわゆる「元和偃武」以後のことである。とは言え、義直は大坂へ出陣しており、戦闘の悲惨さを知らないわけではない。また、時代としては戦いの臭いが立ちこめるときであった。そうした時代に文武両道を掲げ、戦闘のための「武」だけでなく、「文」学問を重視し

たことの先見性を学生に伝えたかった。この義直の姿勢がよく表れ、かつ次世代以降にも継承させようという意志が表れているのが義直の遺した「君戒」であり「初学文宗」であった。

「初学文宗」は、不特定の人々に向けて、わかりやすく人の道を説き、生活信条を確立させようとするもので、儒教を信奉した義直らしさがよく表れている。しかし、長いのである。

まずは「君戒」を選んだのだが、「君戒」には大きな問題がある。田辺裕氏が「君戒」は義直自身が撰述したものではないと論証された。¹⁾田辺氏は、「君戒」は、享徳二年（一四五三）細川勝元（一四三〇—一七三三）が將軍足利義政（一四三九—一九〇）に奉った「君慎」と文章が全く同一であること、実は「君戒」は義直の「御反古二十五冊」中に収められていたが、天明二年（一七八二）になって修復し、「君戒」と題され「御宝訓」とも呼ばれるようになったことなどを論拠に挙げておられる。田辺氏は実に丹念に論証されているので、このように要約してはお叱りを受けるかもしれないが、論文を締めくくるにあたり、

恐らく、義直は当時既に存在した「君慎」の内容がすぐれてゐるので、それをそのまま一字一句も違へず書き写して、子孫の教誡のために子の光友に遺したのが事実²⁾。私もこのことばに共感し、義直が「君戒」をよしとした姿勢を重視することにした。

ともかく学生には、概論ではなく一次資料から事実を読み取ってもらいたいと願っていた。幸い「君戒」はたいへん読みやすく、わかりやすい。第一短い。しかし、義直が感心しただけあり「君戒」には風格があり、私も魅了されたが、学生の心も摺んでいく。全十二条の内容は、

- ① 君主が身をつつしむことが国家安泰のもと。
- ② 君主の行いは学問から学べ。しかし、目前の臣下それぞれに適したことばがけも大切。
- ③ 芸能を嗜むことは文化人として大切だが、ほどほどであること

が重要。

④ 若いときはまず武具を揃えよ。他の物を欲しがらないこと。

⑤ 臣下の諫言を聴け。

⑥ 臣下の器量をしつかり把握した上で、臣下を用いよ。

⑦ 気後れした様子を見せてはいけない。昔の合戦の話は最後まで聴け。また、昔の合戦から学べ。

⑧ 旅に出た時は時間を厳守し、目配りを忘れず、身なりを整えて。

⑨ 礼拝・会合の時は身分を考え、礼に則り行動せよ。

⑩ 物事に傾注しすぎてはいけない。

⑪ 身のたしなみ（つつしみ）を忘れてはいけない。

⑫ 事の大小にかかわらず、諫言を聴け。

と要約できそうだが、要約では風格が伝わらない。ここにテキストにした「君戒」（『名古屋叢書 文教編』所収）の最初の三箇条を示してこう。ただし、『名古屋叢書 文教編』所収の「君戒」に付された漢字は筆者が削除した。

一、君たる事は、萬民をしたがへ、民の心ざしを見る事なり。君のкауせきあしければ、民したがはず。上にはしたがふといへども、大事に及んではいづれもそむくものなり。其上、君のкауせきをまなび、国の風にいるまで、皆あしくなるものなり。かるがゆへに、君のкауせき、ひとりある所をつ、しめば、臣下も其身をつ、しみ、法礼をみだらず、法礼をみだらざれば、国家よくおさまるものなり。

二、かうせきは常に学の心をよく知るをかんやうとするなり。然れども、心を其道によせて、臣下にまみゆる時は、先これにたいめんして、其品々によつて其ことばをかけ、其人により物語をする。学をすればとて、この事におきたれば萬事にあしき也。いはんやよの事におおてをや。

三、げいのうの事しらざれば野人におなじ。しかる時はすこしは知りた

るもよし。然れども其道はおもしろきにより、実なる事をば次にするものなり。其心をもつて能たしなむべき事なり。

以後、十二条まで続く。漢字と平仮名を使い、活字化されているので、よめる、読める。辞書など引かなくてもおおよその意味は読み取れるのだ。

しかし、昔の殿様は生まれついでにの殿様で、殿様になるべく努力をしたことなどあるはずはないと信じていたらしい学生たちは、内容について感想を訊ねても、ヘーッという反応。理解を超える内容ではなかったであろうが、予想外であったのだろう。が、この反応は拒絶に終わるのではなく、次のステップへ踏み出す合図となった。

読めそうだという自信をつけた学生たちの次のステップは、武家の家訓との違いを読み取ってもらいたいとの思いから提示した商家の家訓にはなかった。読めるものの学生の反応は今ひとつだった。

さて、レポートへ

鶴飼ゼミの約束事として、ゼミ生は一セメスターに一本レポートを書かなければならない。レポートのテーマは、私の守備範囲を大きく逸脱しなければ何でもいい！と言ったものの、家訓をそれなりに読み進めてきたから、皆家訓にテーマを求めると思いきや、意外に勝手なこと言う。地元の伝統芸能にしようか、伝統産業もおもしろそうだな等々……だが、一人だけ「君戒」にこだわる学生がいた。

Kさんは義直の「君戒」と水戸光圀が遺した家訓とを比較してみたいと言う。同じ御三家、光圀は伯父にあたる義直を尊敬していたらしい。義直が子孫に遺そうとしたことばと、光圀が残したことば、時代的にも立場的にも大きなズレはない。いいではないか。

レポート準備となると、ゼミの様子は一変する。アカデミックススキルズ

の「レポートの書き方」よろしく、書き方の指導と内容指導の場になってしまふ。学生は毎回、進捗状況を問われ、あれをしろ、これをしろとアドバイス（命令？）を受け、レポートの完成を目指して走る。その間、中間発表で冷や汗、あぶら汗を流すことにもなるのだ。

提出されたレポートはなかなかおもしろいのだが、こんなにテーマがバラバラで、以後Ⅱ・Ⅲ・Ⅳと続くゼミをどう運営していこうかと、教員側は悩んでしまった。

やはり家訓へ

しかし、教養ゼミⅡが始まると、教養ゼミⅠで長良川の鶴飼いについてレポートを書いたIさんが、やはり家訓関連で書きたいと言いつ出した。ゼミⅠで提出したレポートは、レポートの体裁こそ取っているが、いくつかの先行研究の成果を切り貼りして論を展開しており、いささか達成感に欠けるものだったのかもしれない。一次資料に向き合ってみようということだった。しかもIさんは史料を決めてきていた。武家家訓の最初に位置づけられる「今川状」をめぐる問題を探ってみたいというのだ。いいではないか。

もうひとりSさんは、尾張藩七代藩主徳川宗春（二六九六一―一七六四在位・一七三〇―一三九）に関心があった。そこで、家訓ではなく政治の指針を示した「温知政要」に取り組んでみるという。いいではないか。

さらに、新たに仲間入りしたMさんは新渡戸稲造の『武士道』でレポートを書くと言う。私としては山本常朝の「葉隠」がよかったのだけれど、まあ、いいではないか。

このように家訓の周辺にもどってきた学生たちは、それぞれにもがき苦しみながら問題を深めていく。Kさんは、さらに譜代大名井伊直孝の家訓から、外様大名島津綱貴の家訓へ。立場の違い、考え方の違いを家

訓から読み取ろうとする。

Iさんは、今川家の「今川状」が「女今川」「百姓今川」等々に姿を変え、「今川」は教訓ほどの意になったものの、「今川」と言う以上、「今川状」と何らかの共通点があるはずと、追究する。

Sさんは、「温知政要」がどのように政治に反映し、当時の人々がどのように受け止めていたかに関心をもつ。政治への反映、その得失は研究し尽くされている感があり、人々の生活実態を書き留めた文献はないものかと探求する。

これでよいのか

学生たちが果敢に一次資料に取り組もうとする姿が、私にはたいそう頼もしく思える。

教養教育の改革が行われる以前、教養ゼミと称し、二年生にレポートを書かせる科目があった。それを担当することになり、アーネスト・サトウの『「外交官の見た明治維新」』³⁾を読みはじめた。十代の若さで通訳生として来日して以来、通算二十五年もの間、日本で見聞したことを、晩年イギリスでまとめた書物で、好奇心が強く、勉強家で、親日家のサトウが見た日本の様子が、ことの大局と特記すべき細部とのバランスがよく、実にうまく描かれている。受講生はそれなりに関心を示すのだが、イギリス人特有の言い回しを翻訳した日本語はいささか読みにくく、『「外交官の見た明治維新」』をさらに読み進めてレポートを書こうとする学生は、数年間で数人であった。

今、世界教養学科のゼミ生が取り組みつつあるのは、それ程難しくはないにしても江戸時代の文献、いわゆる古文なのである。そして、それをそれなりに読み進めているのだ。そこで、本稿の冒頭に立ち返る、「これでよいのか」である。

教養ゼミの受講生は一セメスターで二単位取得すればそれきりだった。

しかし、世界教養学科のゼミは、本人が希望すれば同一ゼミで三年生・四年生の四セメスター八単位、それに卒業論文の二単位を加えれば十単位取得することができる。現在は三年生・四年生のゼミを固定する学生がほとんどのようだ。それならばもう少し高いレベルで一次資料を読む力が育成できたのではないか。活字化されたテキストで読み始めたが、くずし字、変体仮名のまま読めばよかつたと、つくづく思うのである。

我が校の学生は素直で、お尻をたたけば頑張つて走る。そして、それなりの成果も出す。走れば見える風景も違つてくるはずだし、走ることに楽しくもなろう。教える側の私が、「これぐらいならば」と学生の能力に線を引き、能力も楽しみも伸ばせないでいた気がするのだ。

世界教養学科の学生は、多少の制約はあるものの、あまり学問体系にとられず、その時その時の関心に沿つて授業を受けることができる。が、どうしても概論的な授業を多数受けることになり、学問的な深まりを欠くことになる。そうした状況にあつて、ゼミは腰を落ち着けて問題に取り組める数少ない機会だから、もつと達成感に結びつくテキストを選び、育成すればよかつたと思うのだ。つまり、

「君たる事は、萬民をしがへ、民の心ざしを見る事なり。君のかうせむあしければ、民しがはず。上にはしたがをいへども、大率に及んばいづれもむくものなり。其上、君のかうせきをまなび、國の風土にいたるまで、皆あしがるものなり。かるがゆへに、君のかうせき、ひとりある所をつしめば、臣下も其をつしめ、法礼をみたらず、法礼をみたらざれば、國衆よくおさまるものなり。」
行 勝 勲 要
「一、かうせき常に学のかんやうとするなり。然れども、心を其道によせて、臣下にまみゆる時は、先づこれにたいめんして、英品によつて其ことをかけ、其人により物語をする。学すればとて、この事におこたれば國事にあしむ。いはんやの事におこたを。」
對 面 能 能
「一、わかきときは、物をもあそぶに心あるべき事なり。多分の人、すまの道具、いろ／＼のものすまなる物を見てはほしく、又はこしらへ戻ものなり。先賢士の遺書を極めるはしかり、其外にはこのまざるものなり。是わかき時のたしなみ也。」

「君戒」(『名古屋叢書 文教編』所収)

で読むのではなく、

